

ビジュアル調査法の展開と可能性：集合的写真観察法

日本大学文理学部社会学科
教授 後藤 範章

写真はある一線を越えて“写る”ことがある。めったにないことだが、シャッターを押した人間が、想像もしていなかった世界が写りこむことがあるのだ。そんなとき、写真は人間の頭で考えていた観念的なものをこなごなに破壊してくれるばかりか、いろいろの幻想を湧きださせてくれる。そして写真の背後に隠されている世界が無性に知りたくなり、その1枚の写真から、ある種の知的好奇心をかりたてられる。(内藤正敏 1985: あとがき)

ことばで読むリアリティと、目で感じるリアリティはたしかに差がある。しかしながらその差について、われわれの社会学はつきつめて考えていないのである。(略)現象の原因ともいべき構造そのものは、ほとんどのばあい写真にとれるような実在ではない。それはことば=概念を組み合わせることを通じてしか、描写できない関係性であり、因果連関であり、認識かもしれない。そうした映像的理解の限界の指摘は、ほとんど正しいけれども、なお写真が対象を記述するひとつの方法であるという点もまた、忘れてはならないと思う。(佐藤健二 1996: 236)

ビデオ・映画・TV番組・絵画・彫刻・ポスター・イラスト・スケッチ・マンガ・絵はがき・建築物・景観などを基にした「ビジュアル・イメージ」を収集し整理・加工・保存・管理(データ化)し分析・解釈して、意味世界を探索し新たな知見を提示する調査法である。調査研究のプロセスで、①カメラやビデオカメラといったビジュアルなツールを用いてビジュアル素材を収集する(=研究手段としてのビジュアル・メディア)、②ビジュアル素材を整理・加工・保存・管理して研究のデータとする(=研究対象としてのビジュアル・データ)、③ビジュアル・データを「見ること」に軸足を置いて分析し解釈する(=視覚に基礎を置いたデータ解釈)、④調査研究の成果をビジュアルに表現する(=ビジュアルなアウトプット)、のいずれかまたは全てが含まれる。データの形態であれ、更なるデータを生み出す手段であれ、結果を表わす手段であれ、調査プロセスに不可欠なパートとしてビジュアル素材が生成ないし活用される社会調査の一方法である。

2. 社会調査におけるビジュアル調査法の位置：新しいうねり

ビジュアル調査法にせよ、ビジュアル素材の活用や読み解きにせよ、広い意味でのビジュアル・メソッドは、従来の社会調査ないし社会学の研究では軽視されてきた。

ハワード・ベッカーは、次のように断罪する。天文学や生物学や核物理学などに代表されるように、自然科学はビジュアル・メソッドを不可分なものとして発展してきたのに対して、「これ

1. リサーチ・メソッド **ビジュアル調査法とは：「見る」社会調査**
盛山和夫(2004: 1, 2, 7)に倣えば、社会調査とは解釈である。解釈とは、意味世界を探索することである。社会調査の目的は、経験的データを用いて意味世界としての社会的世界を探索し、新しい知見を提示することである。
- マテリアル
ビジュアル調査法は、ビジュアル素材(写真・

らの可能性を無視し、これらのリソースの良い使用に失敗したのは社会科学だけなのだ」(Becker, H. 2004: 197)、と。ジェフ・ペインとジュディ・ペインは、もっと辛辣に酷評する。「ほとんどの社会学者は『ヴィジュアル的能力が無い』のである。なぜなら、ヴィジュアル・イメージの利用を考慮する痕跡がほとんどないからである」(Payne, G. & Payne, J. 2004=2008: 265)、と。

他方で、見るべき成果も現れるようになっていく。日本社会学会の機関誌『社会学評論』第60巻第1号(2009年6月発行)では、『見る』ことと『聞く』ことと『調べる』こと—社会学理論と方法の視聴覚的編成—と題する特集が組まれた(後藤範章・好井裕明、石田佐恵子、山中速人、後藤範章、安川一、小林多寿子、古賀正義、好井裕明 2009)。収録されている7本の論文のうち、5論文で「映像社会学」「映像フィールドワーク」「ビジュアル・メソッド」「視的経験の社会学」「映画社会学」が主題化され、詳細に論じられている。近年におけるビジュアル・メソッドやビジュアル社会学に対する関心の高まりと調査研究成果の一定の積み重ねが背景にあることは、言うまでもない。

社会調査、とりわけ質的調査において、「視聴覚的再編成」をめざした新たな動きが、いま、着実に歩を進めつつある。

3. 写真というフィールド：カメラの視覚

私は、「写真で語る：「東京」の社会学」と題する調査研究プロジェクトを、ゼミの学生と共に1994年度より積み重ねている(後藤範章 1996, 2000, 2005a, 2005b, 2009; 大谷信介・木下英二・後藤範章・小松洋・永野武 2005 ほか)。写真の中の「細部に宿る神」「細部に現れる啓示」ドゥーイング・ソシオロジーをくみ取って「社会学すること」に取り組むために編み出した方法が、「集会的写真観察法」と

称するビジュアル調査法である。「社会学すること」とは、見えにくい社会のプロセスや構造(不可視性)を社会層(階級・階層・年齢・世代・ジェンダー・エスニシティ、家族・親族・地域・職域、関係・集団・組織など)や因果の関係と絡ませて究明し、可視化・可知化していく「社会的世界の探求」活動が含意されている。

研究の素材とするのは学生が撮影した「東京写真」であり、それらは「東京と東京人に関する多元的で重層的なリアリティが刻み込まれた質的データ群」を構成する。調査は、これらの写真“を”「社会学の眼」で見直す、写真“で”まちや人々を社会的に見る(=読む)ことから出発する。

写真は、このような見方／読み方を最大限に保証するメディアである。それは「無意識が織りこまれた空間」であり、人々は「既知の諸要素を目に見えるようにするだけでなく」、そこから「未知の要素」をも「発見する」(Benjamin, W. 1935-36=1995: 619)。この意味で、肉眼の意識がとらえきれず、また文化的バイアスのもとで見逃してしまう微細なディテールをも公平に記録する、「都市の無意識の標本断片」(西村清和 1997: 34)なのである。意識的に写し、また無意識的に写りこんでいる様々なディテールは、様々なテキスト、様々な物語が語られる断片であり、従って1枚の写真は、「物語素の束」(西村 1997: 45)と見なし得る。「写真を撮るという操作は、自明な存在としての世界が行う自動筆記」(Baudrillard, J. 1997: 47)であり、「カメラの視覚」は写真家の意図や意味が投影される「肉眼の視覚」を覆い尽くす。写真には、写真家の眼にとまらぬ「コードのないメッセージ」(Barthes, R. 1961=1984: 3-4)も写し取られるのであり、この意味で第三者による介入(自由な読解／再解釈)を大きく許容する特性を有している。

となると、問題は「物語素」に応じたテキスト（物語）をどのように構成していくのかに移る。別言すれば、写真から社会学的な視点（アイデア・仮説・概念・命題など）をア・ポストテリオリに見出して、いかなる意味世界を構想し探求するかであり、これを表現する手法が「集合的写真観察法」なのである。写真の撮影以上に、他のリサーチ・メソッドを動員しながら、写真を観察し読み込み解釈して「物語る」ことに力点が置かれる。

ゼミの学生たちは、写真を基に「物語」を構想した上で、写真に写し取られている場面（現場）に立ち降りてフィールドワーク（参与観察、直接観察、聞き取り、アンケートなど）を実施し、関連する文献（先行研究）や史・資料を集め、読み込み分析して、作品のタイトルと400字程度の解説文を練り上げる。かくして、写真＋タイトル＋解説文＝画像^{イメージ}＋テキストのワンセットから成る作品が次々に産出される。グループワークを2ヶ月半ほど費やして仕上げられた作品群は、毎年学内で展示発表^{注1)}する共にウェブサイト^{注2)}でも公開する。1994年度～2008年度の15年間に発表した作品数は、合計で386点を数える。

4. 集合的写真観察法とは：集合表象の結晶化

「集合的写真観察法」と称するメソッドは、このプロジェクトを積み重ねる中で次第に形が整えられ編み出されていったものであり、以下のような特徴点を有している。

(i) 調査と作品化は、次の3段階を経て進行する。 α . 写真“を”見る（→感じる）…写真を直接「凝視／観察」し視認性を高めて「感応」することで、写真から「小さな物語素」を抽出する。 β . 写真“で”見る（→読む）…物語素に対応する「新たにテーマ化した社会事象」を、写真を介して（間接的に）観察し、社会学的想

像力を働かせて「写真の背後に隠れているより大きな社会的世界」を読む。 γ . 写真“で”語る（→調べて物語る）…写真に写っている／写っていない場面・現場に立ち降りフィールドワークを行って実証データを収集・整理・加工・分析し、言葉に置き換えたテキストを写真に「寄生」させて写真と共に語る（＝解釈し物語る）。これらを集団による協働作業として（＝「対話」を重ねて「集合的」に）行うことによって、写真の中に見え隠れしている「社会のプロセスや構造」（不可視性）の可視（視覚）化と可知（知覚）化が図られる。

(ii) 観察（調査）者たちの中で展開するドラマティックな相互作用を積み重ねることで形成される「間主観性」が、作品化に決定的な作用を及ぼす。写真“を／で”見ることを基軸に展開する相互作用を経て、一人一人の認識作用が融合し、「集合的」な解釈枠組みや解釈が織りなされて、^{イメージ}像が結ばれ「物語」が成立する（＝^{コレクティブ・イメージ}集合表象の結晶化）。当初はややもすればステレオタイプに彩られた一面的で表層的な「東京」認識が、フィールドワークと文章化の作業を継起的かつ集合的に重ねる中で、劇的に一変する。

「せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム」が作動し、解釈（読み）に「形」を与え「語り」が成立するのである。そして、「せめぎ合い」が「紡ぎ合い」に転ずる臨界点が、観察者たちの社会的リアリティへの「感応力（センス・オブ・ワンダー）」と「社会学的想像力（ソシオロジカル・イマジネーション）」の「質的転換点」となる。

(iii) 方法の信頼性は、フィールドワークに基づく写真に写る／背後に隠れている「場面（社会的世界）」の再現と「関係者」の主観的意味の理解によって補強される。また、マルチ・メソッドによるデータ収集と分析結果の総合が集団的・集合的な作業として行われることで、信頼性が担保される。

(iv) 解釈の妥当性は、データを多元的・重層的に分析することによって、別個に検証(テスト)される。また、教師(研究者)による「介入」を受けながら形成されるゼミの間主観性(集合性)が、妥当性を担保する。

5. 集合的写真観察法の切れ味：見る・調べる・物語る

(1) 写真“を”見るとのこと：細部に現れる啓示

学生たちは、まちを歩き人々を観察しながら、思いのままにカメラのシャッターを切り、写真を何枚も撮る。現場ではなく、後でプリントされた写真“を”眺めあれこれと議論する中で初めて気づくことが多い。写真を直によく見るこ

とで感応し、「細部に現れる啓示」(Baudrillard 1997: 12)を手に入れるのである。作品1は、団地の“威容さ”に圧倒されて撮ったものである。後日、写真を見ているうちに、棟と棟をつないでいる壁の存在に気づき「!」「?’が発せられた。調べてみると、関東大震災時に数万人もの人々が瞬く間に焼き尽くされた過去の忌まわしい記憶と、そうした事態を想定した防災対策のために築かれた(団地全体を防火壁とする)事実が判明した。この写真は、棟と棟を延々とつなぐ壁に集合的記憶が「刻印」(Tisseron, S. 1996=2001: 52)されている(証立てる)ことを、事前にそうした知識や情報を全く持たなかった写真の読み手/語り手に啓示する。

作品1. 墨田の防災団地 —^{ひふくしょう}関東大震災・被服廠の「記憶の形象」— (2004年度 No. 10)



高さ40mの住宅18棟が約1.2kmに渡り横につながってずらりと建ち並ぶ、墨田区の「白髭(しらひげ)東住宅」。見るものに威圧感を与えるこの巨大な団地には、特別な存在理由がある。

1923年9月1日、関東大震災により東京中が火の海と化した。本所・深川(現在の墨田・江東にほぼ相当する)区民の多くは、隅田川に近く安全だと思われた陸軍被服廠跡地に避難したが、火災旋風が発生し、瞬く間に3万8千人もの死者を出した。旧東京市全体の死者数の約6割に相当する、震災最大の惨劇であった。

この記憶から、都は公有地が多く存在する白髭東地区に、10万人を収容できる避難所(公園)を併設した「防災団地」を、1982年に完成させた。団地には、散水機や放水銃が随所に設置され、避難完了後には5箇所の避難口のシャッターが下り、全体を水で冷やす。それは、燃えない避難所を作る防火壁の役目を果たす。

大震災の痛々しい「集合的記憶」が、「目に見える形」を60年後に与えたのである。

2004年8月17日(火)15時20分
白髭東住宅(墨田区堤通)付近にて撮影

(2) 非対称的な「見る－見られる」関係性：ジェンダーへの／からの視線

ゼミ生（女子学生）たちは、何度となく女性専用車両に乗り込み、つぶさに観察することで、女性専用車両が、多くの女性にとって男女間の不均等で非対称な「見る－見られる」関係から身体を解放できる空間であることを見出し、概念化した。当初は、座席に腰掛けているスカート姿の女性達の両膝の合わせ具合を観察しデータ化することが試みられた。「見られない」ことで膝も弛みがちになるのではないかと考えてのことであったが、残念ながら、膝小僧が見える

ほど短いスカートをはいている女性が少なかったのと、視線を投げかけ続けることが難しかったため途中で断念し、解説文に書かれている「化粧直し」に注目し直した。「見る－見られる」関係性の無化は、「見ない－見られない」空間を立ち上げ、それに準じた空気を醸し出す。東京や大阪などの大都会でしか存在しない女性専用車両は、概ね均等で均質な「見ない－見られない」、この意味で閉じられた“非”視覚的な空間を成立させるのである。こうした知見は、現場に立ち降りて徹底的に「見る（凝視する）こと」によってもたらされた、と言って良い。

作品 2. 女のサンクチュアリ ―ひとときのやすらぎを求めて― (2005 年度 No. 1)



女性専用車両は、2001 年 3 月に京王線で本格運行を開始して以降、痴漢対策を名目に多くの路線で採用された。

男社会の中では、女は昔から「見られる存在」であり続けた。男の視線を常に感じ、気を休める暇もない。そんな中、瞬く間に普及した女性専用車両。混雑率も低く、乗客全員が同性という安心感も手伝って、平穏な空気が漂っている。間違っても男が一步足を踏み入

れようものなら、それまで保たれていた秩序は乱れ、緊張感が走る。お喋りに興じていた人も話すのを止め、怪訝な目で男を射る。

終着駅が近づくと、鏡を開き化粧直しを始める人が多数現れる。女性専用車両から降りることは、女達が再び「見られる」世界へ飛び出すということ。準備を整えた彼女らは、弛めた気合いを入れ直して発っていく。

この車両は、「見られる」ことから一時でも解放されたい女を引き寄せるのである。

2005 年 7 月 1 日(金)8 時半頃

JR 池袋駅(豊島区南池袋 1 丁目)埼京線上りホームにて撮影

(3) 見る＝調べるとのこと：「見る」だけの（見て数える）調査の説明力

当初、次のような方針が立てられた。1) 122

人分の座席中 2 人席が僅か 8 席分しかなく、それ以外は全て個席となっている。2) ブース席は周囲の視線を遮る作りになっており、一見した

ところ長居を促進させるように思える。このことから、効率重視（回転効率の高さと薄利多売の追求）から客に長居をさせて客単価を上げる路線への方向転換を図るための実験店ではないかと位置づけた。この店舗における「脱マクドナルド化」が実証できれば面白い、と期待したわけである。ところが、学生たちが6時間をかけて「直接観察法 (Direct Observation)」(後

藤範章 1996) によって調査したところ、逆の結果が得られた。1人客ほど滞在時間が短く、回転効率が高かったのである。それを受けて、最終的には「食」の合理化に加えて「客」の合理化をも進める“マクドナルド化の最前線”が描かれた。「見て数える調査」によって、当初の予想とは反対の内容に集合表象が結晶化したのである。

作品 3. 「食」から「客」へ —マクドナルド化最前線— (2006 年度 No. 18)



全 122 席の内 2 人席は 8 人分、他は全てカウンター席（手前）と個別ブース席（向こう側）。新宿駅周辺のマクドナルド 9 店舗中こここで採用されており、平日はオフィス街に至近であるために慢性的な満席に陥る。2005 年 12 月 31 日に改装して以降、売上も増加した。

長居を可能にする店舗形態は、一見、効率性・定量化・予測可能性・計算可能性を特徴とする「マクドナルド化 (McDonaldization)」(G. リッツア) に反している様に見える。しかし、2006 年 10 月 18 日（水）の午前 11 時～午後 5 時過ぎに、ここで時間を過ごした 239 人の滞在時間を調査した結果、2 人席の平均 40 分に対し、個別席は 24 分であった。個別ブース化すれば居住性の高いプライベートな空間にはなるが、ビジネスマンの一人客が長居する可能性は低く、結果的に回転効率を高めることができる。

連れだった客を大胆に切り捨てて一人客をメインターゲットとするこの風景は、マクドナルドが「食」の合理化のみならず、「客」を合理的に選別し始めたことを示している。

2006 年 7 月 15 日 (土) 15 時 30 分頃
マクドナルド新宿スバルビル店内 (新宿区西新宿 1 丁目) にて撮影

(4) 視覚空間：三重のまなざしの交差

G. ジンメルは、「大都市における交流」が「小都市におけるそれにくらべると、他者の語ることや聞くことにたいする他者を見ることの測りぐたい優越を示している」と説いているが (Simmel, G. 1908=1994:252)、シオサイトと浜

離宮の間に成立する「対向するまなざし」には、ジンメルの言う「まなざしの(目と目のあいだにつくりだす)互酬性」(ibid:254)は(互いに望遠鏡でも使わない限り)成立しない。ここでのまなざしは、スーパースケールの空間上で「対向」するのである。

作品 4 の写真を見つめる観察者／読者の視線は、手前の浜離宮からシオサイトのビル群へ向かうまなざしと、ビル群から浜離宮へ向かうまなざしが対向するであろう空間に向けられる。そして、見る一見られる主客の関係性が双方向的に成立することで、浜離宮の位置づけと都心部の景観のあり方が実質的に変質していること

を読み取る。都心空間が“対面的な人間関係を超越した”視覚の優越する空間と化していることが表現されると同時に、そうした対向するまなざしに観察者／読者によるもう一つのまなざしが直交することで、写真を介して三重のまなざしが交差する視覚空間が立ち上がることになる。

作品 4. 対向するまなざし —浜離宮と汐留との「借景」関係—(2003 年度 No. 30)



浜離宮恩賜庭園(以下浜離宮)から汐留シオサイトを仰ぐ風景である。

徳川将軍家の庭園であった浜離宮は 400 年近い歴史を持つ名庭園で、東京湾の海水を引き入れた汐入の池が特徴的である。以前は庭園目当てに訪れる人々のみを迎え入れる、その意味で周りの都市空間から孤立した「小宇宙」であった。しかし、汐留の再開発によって、浜離宮とビル群とは双方共に「見る一見られる」関係に入る。シ

オサイトからすると、浜離宮を「借景」として組み込むことで、「都心景観」の完成度を高めた。浜離宮からすると、従来の浜辺からシオサイトに「借景」を替えることで、東京湾に面した縁辺部に立地する隠れた庭園から、巨大都市空間の内部に立地する「都心の庭園」に変質させた。

緑豊かな庭園と隣接する巨大ビル群。それぞれに身を置く者たちは、お互いの存在を目視することがないまでも、否が応でも視線を投げかけ合う。まなざしを別次元から対向させるこの空間と景観は、いかにも「現代東京的」と言って良い。

2003 年 7 月 27 日(日)13 時頃

浜離宮恩賜庭園(中央区浜離宮庭園 1 丁目)にて撮影

6. ビジュアル調査法の可能性：社会的世界へのアクセス・ポイント

集合的写真観察法は、肉眼では捉えきれない都市の意識や無意識が写り込む写真を素材に、調査者(写真観察者=作品制作者)の集合的な視覚経験がベースとなって成立する。それは、

「写真“を”見ること」によって感応力を高め、小さな物語素を引き出し、「写真“で”見ること」によって社会学的想像力を働かせ、「写真の背後に隠れているより大きな社会的世界」をイメージさせ読み込ませる。そして、フィールドワークと文章化の作業(凝視と対話)を通して、

イメージ
 構想した物語の中身が検証され、修正され、再
 構成され、視覚化されて、画像とテキストから
 なる作品を成立させていく。このことによって、
 それまで見えていなかった“あらたな構造”や
 “写真の背後に隠されている世界”がくっきり
 と像を結び（結晶化して）見えてくる。「見る
 /見える」対象の幅と深さが増し、社会的に
 語るに足る面白さ（物語素）を「見つめ/見極
 め」て主題化し、フィールドワークによって得
 られたデータや情報を整理・加工・分析・読み
 込み解釈してテキストを練り上げ、それを画像
 に添えて作品化する（＝物語る）。写真を見、写
 真でまちや人々を社会的に見る営み（＝「見
 る/見える/見つめる/見極める」集合的な視
 覚経験）が、対話を介しての言語化の作業を随
 伴しながら意味世界が探求され、集合的な解釈
 枠組みや解釈を織りなして、
 ビジュアル・ナラティブ コレクティブ・イメージ
 写真を基にした物語（集合表象）が構築され
 るのである。

集合的写真観察法は、ビジュアル調査法の持
 つ豊かな可能性を指し示している。「イメージは、
 社会的世界へのアクセス・ポイントであり、そ
 のアーカイヴでもある」（Knowles, C. &
 Sweetman, P. 2004: 7)のだから。

注1) 2009年度は、11月17日～26日の10日間に
 渡って日本大学文理学部で開催される第5回
 “Dialogue between Sociology and ‘visuals’”
 “「東京」を観る、「東京」を読む。”—東京写
 真：新聞ジャーナリズムと社会学—展（主催：
 日本大学文理学部／共催：毎日新聞社・東京
 新聞写真部／後援：日本都市社会学会・東京
 都世田谷区ほか）で展示発表する。

注2) 「東京人」観察学会（日本大学文理学部社会
 学科・後藤ゼミ）のWebサイト。URL
http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngo-toh/tokyo/

※ 引用・参考文献に関しては、本文中に（著
 者 出版年：頁）のみを掲げ、書誌情報につい
 ては紙幅の制約から全て省略する。それらを含
 め本稿を補うものとして、以下を参照されたい。

- 1) 後藤範章「ビジュアル・メソッドと社会的想像力—『見る』ことと『調べる』ことと『物語る』こと—」（日本社会学会『社会学評論』第60巻第1号、有斐閣、2009）
- 2) 後藤範章「ビジュアルな記録を利用する」（谷富夫・山本努編『よくわかる質的社会調査—調査プロセス編—』ミネルヴァ書房、近刊の予定）
- 3) 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編著『社会調査へのアプローチ—論理と方法—[第2版]』ミネルヴァ書房、2005

筆者プロフィール

後藤 範章（ごとう のりあき）

1985年日本大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。日本大学助手・専任講師・助教授を経て、2002年より現職。専攻は、都市社会学・地域社会学・視覚社会学・社会調査論。現在、日本都市社会学会理事、一般社団法人社会調査協会理事、ほか。

1994年度より、ゼミの学生と共に“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクト（「東京人」観察学会）を推進し、「集合的写真観察法」と称する新しいビジュアル・メソッドを開発・実践している。